宮古島市総合博物館制作紙芝居『よしくんの少年時代』

久貝　かおり（宮古島市総合博物館学芸係）

紙芝居／（原文）久貝 かおり、（絵）伊良部 映里、（題字）久貝 美和

はじめに

宮古島市総合博物館では、平成三十一・令和元年度に紙芝居『よしくんの少年時代』を制作した。本紙芝居は、博物館見学で訪れる市内の小学三年生を対象として、次年度より読み聞かせを行う予定である。本稿では、テーマ選定理由と紙芝居の内容、また、最終頁にて本紙芝居を制作する際に参考にした民具を紹介する。

1．テーマ選定理由

当館では、平成三〇年度に紙芝居『平良市の三大事業』を制作しており、当館紀要第二十四号「宮古島市総合博物館制作紙芝居『平良市の三大事業』」にて報告している。今回も前回同様、テーマを決める際に重要視したのは、「より利用頻度が高いテーマにすること」、「親しみやすく、分かりやすい内容にすること」であった。

『平良市の三大事業』は、「電気や水道、港が整備される以前のくらし」、「三大事業開始」、「三大事業後のくらし」の三つの構成で、昔のくらしや三大事業について学べる内容とした。これらは、小学四年生の社会科の単元「昔から今へと続くまちづくり」に近いものであり、三年生には予習として使える教材として制作した。

そこで今回、三年生の社会科の単元「変わるわたしたちのくらし」に組み込まれている博物館見学の中で、限られた時間内に昔のさまざまな民具や暮らしを紹介することができないかを模索した結果、テーマを「昔のくらし」とした。

紙芝居『よしくんの少年時代』は、昭和五〇年頃の平良市の漁村に住む、小学三年生の男子を主人公とし、「モノを生み出す（創造する）暮らし」、「日常の暮らしの中にある遊び」、「季節の催しの中にある遊び」を通して、昔のくらしをより親しみやすく、想像しやすい内容とした。

これらの制作には、実際に体験した方の声を反映させるようにしたが、描写の難しい内容は、別のストーリーを仕立てたものもある。そのため事実と想像を取り混ぜて制作しているが、七〇年前の子どもの遊びが今の子ども達に伝わりやすいようにした。

昔と今は自然環境や暮らしが異なる。七〇年前の世界は、子どもが逞しく生きて行く術を大人になるまでに身につけていく世界のようで、彼らの遊びの中には、常に子どもなりの責任と自由が存在していた。大人顔負けの処世術をそれぞれの地域・社会で育んでいく土壌があったということが確認できた。

2．紙芝居の内容

紙芝居の内容は次のとおりである。

一景　表紙

【導入】

今日は、久松の松原※1出身、よしおじいが子どもの頃の暮らしと遊びを紹介します。よしおじいは、今から七〇年くらい前※2に久松小学校※3に通っていました。

この絵の中に生きものがいますが、何がいますか？

（間をおいて）

ヤギにカニ、セミがいますね。お話のなかにも、これらの生きものが登場します。

真ん中に鳥が描かれている箱がありますね。なんの箱だかわかりますか？

（間をおいて）

これはマッチの箱です。マッチは、火をつける道具です。マッチを何に使うのでしょうか？

それでは、よしおじいこと、よしくんの少年時代のはじまり、はじまり～。

合計　二三七文字

※1　宮古島市平良の南西部に位置する地域。

※2　二〇二〇（令和二）年から七〇年前の一九五〇（昭和二十五）年を想定。

※3　松原と久貝地域の小学校（七〇年前当時は平良市久松小学校。現宮古島市立久松小学校。）（参考文献1）

二景　孫とよしおじいの登場

★三分の一のみ引き抜く

小学三年生の孫、寛太が学校帰りによしおじいの家に遊びにきました。

寛太　「よしおじいの家は何もないからなぁ～。ゲームしよう。」

★全部引き抜く

寛太　「よしおじい、遊びにきたよ。あれ？何をしているの？」

よしおじい「宮古凧※4をつくる準備をしているよ。」

寛太　「え？凧をつくるの？」

よしおじい「あんたなんかは携帯電話やゲームで遊んでいるけど、おじいなんかの子どものときはこれで遊んでいたさ」

寛太　「でも、よしおじい、今は、作らなくても売っているよ。」

よしおじい「そうだね～。でも、今の時代はなんでもお金で買えるからつまらないと感じるさぁ。おじいの小さい頃は何もなかったから、何でも手作りして楽しんでいたよ。」

寛太　「え～。なんで。今も楽しいよ。昔の方が大変そうだけどなぁ～。」

合計　二九五文字

※4　竹で骨を格子状に組み、墨を塗った菱形の紙で、骨と骨の交差する部分に一つ一つ貼り、三角形の紙で左右のパニ〈羽〉となる部分に上から下まで貼りつける。（方言名：ミャークカビゥトゥイゥ（宮古紙鳥））（参考文献2）、写真1

三景　久松小学校の青空教室

よしおじい　「そうだね～。おじいは、久松小学校に通っていたんだけど、一年生の頃は、戦争の後で、校舎もなにもなかったから、木の下で勉強したよ。新しい教科書もなくて、お下がりを使っていたさ。もらえなかった人は、隣の人に見せてもらってね。机もイスもないから、地べたに座って、板を勉強机代わりにしていたさ。」

寛太　「校舎がなかったの！？やっぱり大変だったんだ。」

よしおじい　「雨の日には学校は休みだったよ。授業中に雨が降ってきたら、シートーヤーという黒糖を作る小屋まで移動して、雨宿りしていたさ。」

寛太　「雨の日は休み！？いいなぁ～。」

合計　二四六文字

四景　布袋を持って海岸にいるよしくん

よしおじい　「そうよ。でもね、二、三年生の時に、学校の校舎や運動場※5を地域の人達と一緒にみんなで作ったよ。」

寛太　「え、自分たちで？今の久松小学校はおじい達が造ったの？」

よしおじい　「まさかよ。今のコンクリートじゃないさ。カヤという植物で造った校舎だったよ。屋根もカヤで葺（ふ）いて、壁もカヤを編んだものを組み合わせて、大人が造っていたさ。こども達は、床にナウサ※6を敷いていたよ。」

寛太　「ナウサって？」

よしおじい　「ナウサは、砂や砂利のことだよ。朝、登校するときに、海まで行って、ナウサを布袋（ぬのぶくろ）※7に入れて、校舎や運動場まで運んでいたよ。みんな、いつでも助けあっていたし、何でもイチから作るから楽しかったさ。」

合計　二八〇文字

※5　平良市久松小学校の運動場（現在の宮古島市立久松中学校のグラウンド）

※6　琉球石灰岩を砕いた砂・砂利（方言名：ナウサ）

※7　麻製の布袋（方言名：ショーシンガー）写真2

五景　ハーリー観戦！！

よしおじい

「季節ごとにも色々な楽しみがあったよ。今でも、旧暦の五月にはこの近くの海岸で舟こぎ競争のハーリー※8があるでしょ？昔の漕ぎ手はハーリーに意地と誇りをかけていて、絶対に負けられない戦いだったよ。だから、漕ぐのが上手な選ばれた人しか、舟には乗れなかったさ！ハーリーの前には仕事も休んで、練習していたよ。本番では、漕いでいる姿が水面すれすれを飛ぶ翼を広げた鳥のようにみえて、ズミ※9だったさぁ～。年に一度、暑い夏が始まろうとしている時に、カッコイイ人達の戦いを観に行くのは、楽しみだったよ。」

寛太

「そうなんだ。僕も大人になったら、漕ぎたいなぁ～」

合計　二六四文字

※8　旧歴の五月に行われる久松地区の年中行事。海上（航海）安全、豊漁祈願等。（参考文献３）

※9　爽快な気分。喜びの極み。人の技術や芸ごとの仕上がりが見事なさま。わくわくすること。（参考文献４）

六景　草競馬

★半分引き抜く

寛太　「ほかにはどんなことをしていたの？」

よしおじい　「よく畑で遊んでいたよ。いつもマッチを持ち歩いていて、イモやハトやセミを焼いたり、蒸したりして食べ比べをして、おやつにしていたさ。ほかにも、ウズラの卵を探しに遠くの飛行場まで歩いて行ったよ。卵を持って帰ったらおかあさんが喜んでくれたからうれしかったな。ウズラの卵は、四個以上だと、鳥になろうとしている卵もあるから、持って帰らなかったよ。これは、近所の兄さんから教えてもらったさ。」

★全部引き抜く

よしおじい　「一番楽しかったのは草競馬※10だったな。落ちたら大けがだからね、落ちないように馬にしがみついていたさ。負けたら、せっかく刈り取った草を相手に取られるから必死だったよ。」

寛太　「え、草？何につかうの？」

よしおじい　「家で飼っているヤギのエサだよ。」

寛太　「昔は楽しい遊びがいっぱいあったんだね。」

よしおじい　「そうさー、でも、こわい遊びもあったよ。」

合計　三六二文字

※10　馬に乗って競争するこどもの遊び。

＊モッコ　アダンの気根などを編んだもので、イモや草などを運ぶ道具。（方言名：オーダ）（参考文献５）、写真３

七景　肝試し

よしおじい　「お盆の頃には近所の子どもたちで肝試しをやっていたさ。」

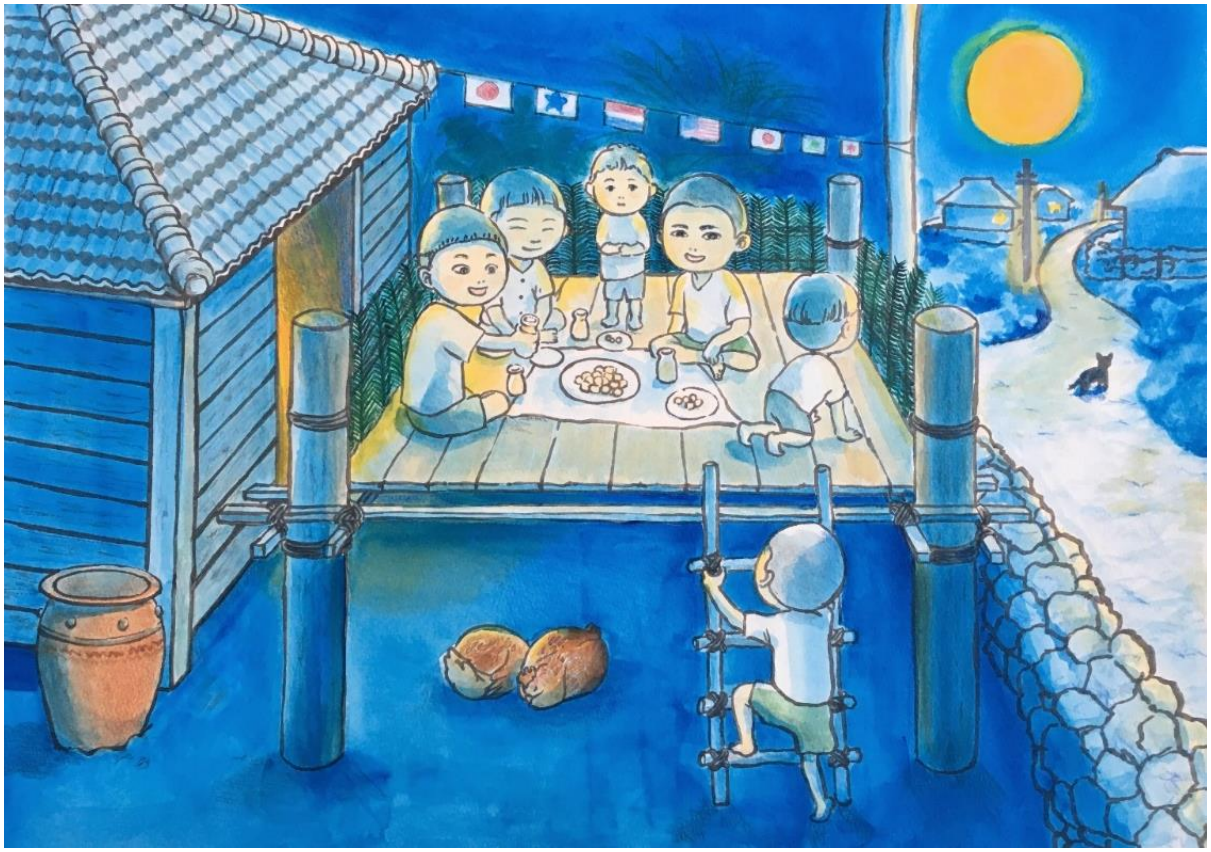
寛太　「え、どこでやったの？」

よしおじい　「平良のまちの近くにあるお墓でやったよ。まだ明るいうちにお墓の近くの木に布を結んでおくさぁね。それを、夜になってから、一人で取りに行けと、近所のお兄さんにいわれたよ。」

寛太　「そして、どうしたの？」

よしおじい　「おじいは、その布を、がんばって取りにいったさ。しかも、その場所は、人さらいが出るとも言われているところだったわけ。今みたいに、家も街灯もない真っ暗な中、月明かりを頼りに進むから怖かったよ。おまけに、取ってきた布を戻してこいと命令されたけど、怖かったからそのまま捨ててきたさ。」

合計　二七五文字



八景　十五夜

寛太　「よしおじいが子どもの時は、子どもだけで夜、遊べていたんだね。」

よしおじい　「そうよ。とくに十五夜※11はすごかったよ。近所の子どもたちでグループを作って、お月見をしながら真夜中まで遊んでいたさ。ちゃんとね、グループごとに月見をするタナ※12と呼ばれる舞台があって、おじい達のタナは、おじいの家の前にあったよ。

タナは、それぞれの家から床板を一枚持ち寄って、お兄さん達が中心になってつくったよ。釘は買えないから、落ちている釘をまっすぐにして使っていたさぁ。」

寛太　「タナは当日つくったの？」

よしおじい　「いやいや、一ヶ月くらいかけてつくったよ。当日は舞台の上で持ち寄った重箱やお菓子を食べてあそんださ。前もって仲間からお金を集めて、平良のまちでお菓子をたくさん買ったな。ダンゴ※13と呼んでいたお菓子がおいしかったな～。」

寛太　「子ども達だけのお月見、楽しそうだねぇ～。」

合計　三五八文字

※11　旧暦の八月十五日の夜に行う行事。（方言名：ジューグヤ）

※12　タナのほか、ユカニ・ユカとも呼ばれる。

※13　キャラメルのような食感のバター飴の様なもの。

九景　サシバ捕獲

よしおじい　「夜といえば、寛太はサシバを見たことあるか？サシバは十月頃※14に宮古に渡ってくるタカの仲間で、昔はたくさん飛んできたから、おじいは夜にもよく捕まえていたよ。」

寛太　「捕まえたサシバはどうしたの？」

よしおじい　「お母さんが平良の市場に売りに行っていたよ。貴重なタンパク源だったからね。子どもたちの遊び相手にもなるし、おじいもよく遊んださ。」

寛太　「サシバはどうやって捕まえたの？」

よしおじい　「昼間はツギャ※15と呼ばれる大きな罠で捕まえたよ。あらかじめ捕まえておいたおとりのサシバでおびき寄せて捕まえていたさ。夜は、眠っているサシバを捕まえに行ったよ」

寛太　「え～楽しそう。僕も捕まえたい。」

よしおじい　「あがい～。今は、サシバを捕まえたら、あんたも捕まるびきさぁ～」

寛太　「おじいの子どもの頃がうらやましい。」

合計　三二一文字

※14　寒露の時期（例年十月八日～十月二十二日）

※15　サシバ捕獲用の小屋。写真４

十景　イザリ※16

よしおじい　「海でもたくさん遊んだな。久松漁港の近くは、今と違って砂浜が続いていたから、海でいろんなものが捕れたよ。」

寛太　「何が捕れたの？」

よしおじい　「カニやエビをよく捕ったよ。カニの巣穴周辺を足裏で探してつかまえるさ。カニは年中捕れたな。エビは満月の夜に、三人一組になって捕りに行ったよ。エビをつかまえる道具※17を持つ人、エビを入れる籠※18を持つ人、灯り※19を持つ人の三つの役割があったさ。車のタイヤを裂いて火をつけたから、帰る頃にはススだらけで、みんな顔が真っ黒になっていたさ。捕ってきたものはお母さんに平良のまちへ売りに行ってもらったよ。いいお金になるから、おじいの文房具も買ってもらったよ。」

合計　二八三文字

※16　冬場の大潮の時に、夜間イノー（礁地）内を歩き廻ってエビなどを捕獲すること。

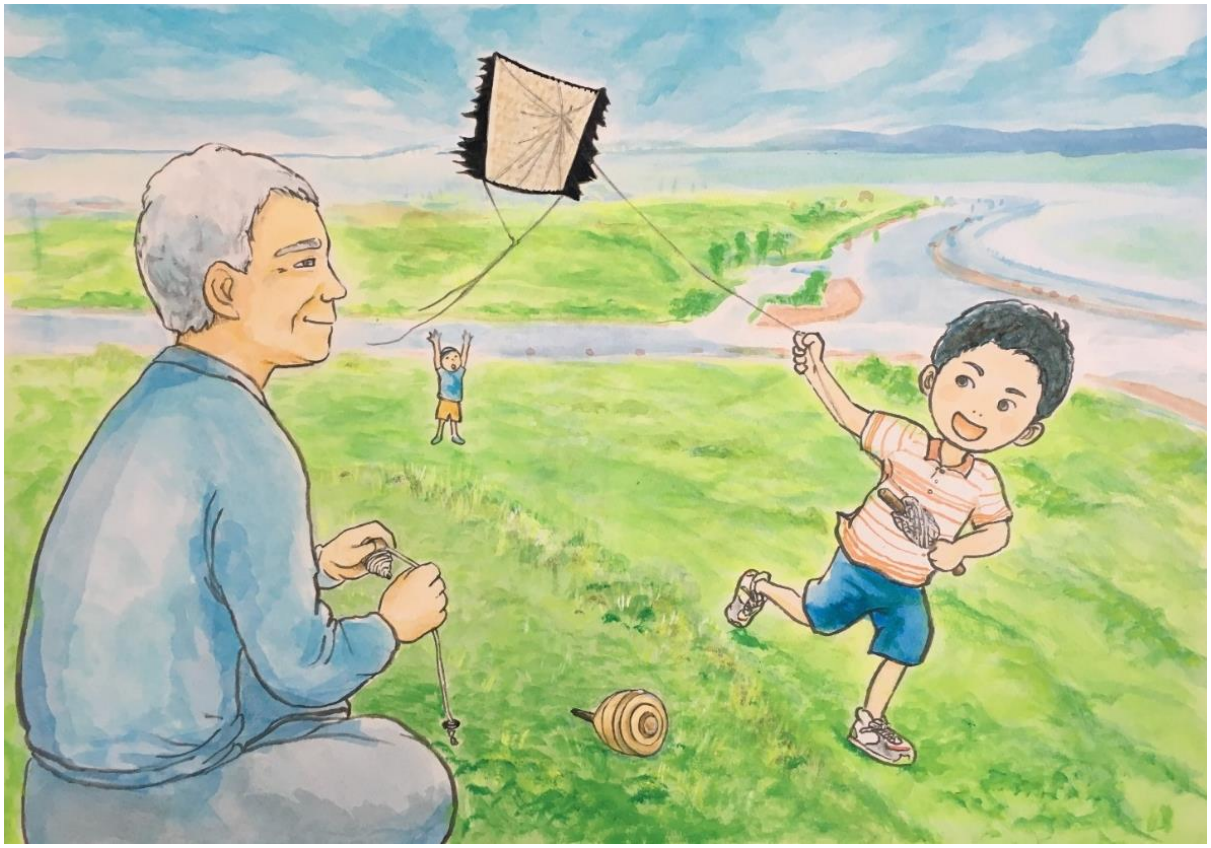
※17　四つ手網（方言名：ウシャン）写真5　エビが驚いて後ろに飛ぶ習性を利用した捕獲道具。

※18　腰籠（方言名：ソーヌッファ）写真6　おもに海に行くときに腰に下げ、海産物を入れて持って帰る道具。

※19　松明入れ（方言名：ゴーダ）写真7　燃料には、松木の他、子どもでも手に入りやすい廃材のタイヤを利用していた。

（※16　～18　参考文献6）

十一景　宮古凧あげ



寛太　「よしおじいの小さい頃は大変だったと思ったけど、楽しいこともたくさんあったんだね！」

よしおじい　「今作っている宮古凧もおじいの小さい頃の楽しみでもあったよ！今度お正月にとばしてみるか？」

寛太　「やった～！！僕も作りたい！」

そしてお正月。寛太とよしおじいは近くの広場で、よしおじいと一緒に作った凧をあげました。

みなさん、よしおじいの子どもの頃は、今と比べてどうでしたか？みなさんもおじいさん、おばあさんに昔のことを聞いてみてくださいね。

おしまい

合計　二〇八文字

＊コマ　テリハボクなどの堅い木で作られ、先端の尖った部分は、頭を切り落とした釘を打ち込み軸を作る。（方言名：ズグル）（参考文献７）、写真８

おわりに

令和三年度、社会科の授業の一環として博物館見学をする小学校が三年生だけでなく四年生も相次いだ。これは、新型コロナの影響と思われる。例年は、三年生の社会科の単元「変わるわたしたちのくらし」中で、博物館見学があり、そのプログラムの中に『平良市の三大事業』の紙芝居を組んでいる。しかし、今回四年生にも三年生同様のプログラムを組んだ。四年生は既に「平良市の三大事業」を勉強してきているクラスがあったが、そのクラスからは、学習した内容が深まったという声が聞こえ、その効果を感じることができた。

『よしくんの少年時代』は、昔の道具やくらしを紹介することで家族や近所の子ども、地域との関わりや動物や植物との関わりを丁寧に描くことができた。約七〇年前の人々のくらしは、一人一人の人間が責任を果たすことと自由が存在し、子どもの世界でも役割があり、郷土（宮古）文化の中で自由な遊びを描くことができる存在であったと感じる。

本紙芝居は、次年度から読み聞かせをはじめる予定である。子ども達の社会科の授業の一環として博物館見学をする小学生に向けたテーマで制作にあたったが、郷土の歴史に興味を持って学んでいける土台づくりができたオリジナルの紙芝居ができたと思う。これからも、郷土の歴史を題材にしたテーマで続けていきたい。

謝辞

紙芝居制作にあたりご協力いただきました、宜野座村立博物館の田里一寿様、山川須真子様、調査にあたりご協力いただきました下地義一様をはじめ関係者の皆様にこの場をかりて心より感謝申し上げます。

参考文献

1　宮古教育誌編纂委員会　一九七二年『宮古教育誌』石橋印刷・事務機社
2　平山輝男　一九八三年『琉球宮古諸島方言基礎語彙の総合的研究』桜楓社
3　平良市史編さん委員会　一九八七年『平良市史　第七巻　資料編5（民俗・歌謡）』
4　与那覇ユヌス　二〇〇三年『宮古　スマフツ辞典』沖縄コロニー印刷
5　上江洲均　一九七三年『沖縄の民具』慶友社
6　宮古島市総合博物館　二〇一五年『宮古島市総合博物館収蔵資料目録―民俗資料編―』
7　沖縄県立博物館　一九九四年『子どもの世界―宮古・八重山編―』

紙芝居制作参考民具

写真５　四つ手網（方言：ウシャン）

写真１　宮古凧（方言：カブトゥイ（紙鳥））

写真６　腰籠（方言：ソーヌッファ）

写真２　麻袋（方言：ショーシンガー）

写真７　松明入れ（方言：ゴーダ）

写真３　モッコ（方言：オーダ）

写真８　コマ（方言：ズグル）

写真４　サシバ捕獲具（方言：ツギャ）

※方言名については、2022 年に宮古島平良字松原出身の方に聞き取りした呼び名となっている。